2005.01.02～2005.01.18更新

「手巾（シュキン）」攷

室町時代、「手巾」と表記して、何と読むのかと云えば、音読して「シュキン」乃至「スキン」。訓読して「たなこひ」と読んでいる。この「手巾」なる物、本邦において何時頃より用いられていたのだろうか、これを考察し、その素材そして用途などについて検証していくことにしよう。

源順の『**倭名類従抄**』に、「手巾太乃己比」、平安時代末の**観智院本**『**類聚名義抄**』に、「手巾タノコヒ〔平・平・上濁・平〕」〔法中102③〕、鎌倉時代の『**伊呂波字類抄**』に、「手巾タナコヒ」〔巻四407⑥〕とあって、「手巾」の語を訓読している。

その訓みだが、本邦古辞書である**観智院本**『**類聚名義抄**』に「たのこひ」、鎌倉時代の『**伊呂波字類抄**』に、「手巾タナコヒ」と変化し、訓じられている。室町時代では、『**運歩色葉集**』に「**手拭**タナコヒ」と表記字が替わって用いられている。また、室町時代の『**下學集**』にあっては、「手巾テノコヒ」と見えている。この「てのこひ」の訓みは、江戸時代に継承され、標記語は異なるものの『**書言字考節用集**』に「**帨巾**テノコヒ」、『**和漢三才圖會**』にも「**帨**テノコヒ」と記載する。これが、江戸時代の『**倭爾雅**』に、「手巾テヌグヒ」『**言元梯**』に「**手拭**テヌグヒ」と現在の呼称「てぬぐい」へと変化しいることが判るのである。

此語の訓みの變遷について見るに、「たのこひ」→「たのこひ」→「たなこひ」→「てのこひ」→「てぬぐひ」→「てぬぐい」と表記されてきたことになる。

次に文字表記について考察するに、単漢字「巾」の文字乃至は「帨」の文字が『**禮記**』に見えている。本邦古字書『**新撰字鏡**』に、「肉式」「榛」の標記文字を収載し、語注記に「巾也、太乃己比」と記載が見えている。この二種の文字は特殊な漢字表記であり、通常は「巾」の文字で表現する。『**説文**』に「巾」を「佩巾也曾从冂｜象レ糸也、凡巾之屬从レ巾」とし、『**玉篇**』に「巾佩巾也、本以拭レ物云々」とあって、糸製の品物で常に身につけ、汚れを拭うために用いたことが知られるのである。次に「帨」は『**儀禮鄭注**』に、「帨〻佩巾也」、また『**玉篇**』に「帨〻巾也」、『**字彙**』に「帨音税用以拭レ手者」とあって、同様の用途に用いた品物であることが判るのである。本邦での文字標記は、この「巾」で始まり、次に熟語「手巾」が用いられてきている。『**延喜式**』『**和名抄**』『**名義抄**』『**色葉字類抄**』『**北山抄**』、『**庭訓往來**』とこの標記語は時代を永く継続して用いられているのである。

また、「【巾】＝手拭いの意」の文字用例としては、僧景戒編『**日本霊異記**』巻下第十二の

奈良京藥師寺東邊里有二盲人一《中略》往來之人見哀レ之者錢米穀物施二置巾上一云々巾太乃己比

に見えている。往来の人が盲人を哀れんで、「錢・米・穀物」を巾の上に置いて布施したという内容である。その語の注記に「太乃己比」の訓読がなされている。

〔未完〕